教えの庭から

コロナ禍での遠隔授業

出雲市斐川町・仁照寺住職　江角　弘道

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて「緊急事態宣言」が発令されたため、全国の大学が4月からの開講を見直すことになりました。大学は、従来「対面授業」で教育していますが、3密を避けて開講できなければ「大学崩壊」につながってしまいます。文部科学省は、「対面授業」に代えて「遠隔授業」の活用について、通知を出しました。このため、多くの大学は、「遠隔授業」をしています。

10年前から、島根県立大学看護栄養学部の公衆衛生看護方法論Ⅰ（個人・家族）の一こま「家族の力量を活かした社会活動」の招致講義をしています。講義では、「1999（平成11）年に、次女真理子（当時20歳）が交通犯罪で理不尽に突然亡くなったことにより、残された家族は、悲しさ・無念さでつぶされそうになりました。しかしながら、この理不尽な無念さを胸にいだきながら、夫婦で、命の大切さ・尊さを、世の人、特に若い将来のある人たちに話す社会活動に至った経緯」などを話しています。

挿絵　平尾恵郷

遠隔授業をするために、学生のいない教室で、60分ぐらいの講義をし、その動画が作成され、6月4日から10日まで配信されました。学生はその7日間の好きな時に視聴でき、期間中であれば何度でも視聴ができます。学生は、慣れない遠隔授業、次から次へと出される課題、人と触れ合うことができないストレス等々を抱えている状態の中で、動画を見て感想を書いています。感想の一部を紹介します。（紹介については許可を得ています）

学生A「将来、看護職者として患者だけでなく、患者の家族にも寄り添っていき、少しでも家族の悲しみを違う形にしていけるような看護をしていきたいと私は考えていた。しかし、その看護をする前に、前提として自分の命の尊さ、人の命の尊さを知らなければ、本当に人に寄り添える看護はできないのではないかと今日の講義を聞いて感じた」

学生B「人の死には大きな悲しみがあり、その悲しみには人を動かす大きな力があるように感じました。そして『悲しみの質』という言葉を初めて聞き、とても印象に残りました。私は今まで『悲しみ』を一つのものとして考えていたけれど、人それぞれ悲しみが違うこと、感じ方、考え方、向き合い方が違うことを学ぶことができました」

学生C「命とは自分だけのものではなく、周りの縁のある人すべてのものであり、ひとりの死は周囲の多くの人に影響を与えるということが分かった。あたりまえのことだと思っていることに感謝をすること、生きていることそのものが素晴らしいことであるということを学び、私も今を生きて毎日を過ごせているということに感謝していきたいと思った」

学生D「コロナ禍の影響でアルバイトが思うようにできず生活に困っているなか、両親が食料品や日用品を送ってくれたり、地域の方々が支援物資を準備してくださったり、自分は『生かされているのだ』と実感する場面はたくさんありました。この日常は、決してあたりまえなことではなく、たくさんの人の支えがあって、今の生活が成り立ち、今の私が存在するのだと教わりました」